



## 平溪線 — 恋物語を紡いで走る旧炭鉱鉄道

# 「恋恋風塵」の故郷

う古いことではない。工場跡の黒ずんだ壁に右から左へ赤で大書された「産煤裕國(石炭で国を繁栄させよう)」の文字が、いつそう寂寥感を増している。

次の三貂嶺駅が平溪線の起点である。全線12・9キロ、本線から離れた2本のレールが、ほんの数十年前の「遠い昔」へと我々を運んでくれる。途中の踏み切りはたった一カ所。町らしい町もほとんどない。列車はいくつものトンネルを抜け、はみ出した木の枝を擦り、民家の軒先をかすめながら進んで行く。わずか30分の旅である。

平溪線は、1921(大正10)年、鉱業軽便鉄道として敷設され、29(昭和4)年に総督府鉄道部に経営を引き継がれたという。

終点の菁桐駅は、今も建設当時のまま、木造の駅舎が機能している。この小さな駅にかつて12人の駅員が勤務していたという。にわか信じがたいが、駅のまん前には最盛期に数万人が働いていたという巨大な選炭場跡がホームを見下ろしている。

70年代、エネルギー革命の到来は、瞬くうちに石炭を基幹産業の「王座」

から引き摺り下ろした。解体されることもなく放棄されたおびただしい数の採炭施設が、そのあまりに突然の終焉を物語っている。

平溪線は僅かな沿線住民の足としてなんとか命脈を保ったが、廃止という運命が待ち受けていた。その平溪線を救ったのが、1本の映画だった。1987年に封切られた侯孝賢監督の珠玉の名作「恋恋風塵(れんれんふうじん)」である。

**淡くてせつない恋の物語**

主人公の阿遠(アエン)は中学3年生。彼は、平溪線に乗って町の学校に通っている。隣の席には、いつも幼馴染の阿雲(アウン)がいた。阿雲はまだ中学校1年生の少女である。

60年代末期、石炭産業が斜陽となり、人びとの暮らしに影を落とし始めている。落盤事故で身体が不自由な父親を気遣って、阿遠は夜学に通うために台北に出る。小さな印刷工場に住み込みながら苦学する阿遠の惨めな日々。そして、2年後にやはり台北に出た阿雲とのつましい生活が坦々と描かれていく。



【左上】十分-大華間を行く。観光列車として周囲の風景に合わせたデザイン。【右上】十分駅ホームで出発を待つ「冷氣柴客」  
【左下】十分駅近くの選炭場跡。沿線には遺棄された炭鉱施設が点々とある。【中】嶺脚駅。ホームの駅名標示も郷愁をそそる。【右下】終点「菁桐駅」近くの炭鉱入り口

台湾鉄道は100年以上の歴史があるが、10年ほど前に南廻り線が開通して、鉄路はようやく一つの輪になった。台北駅を起点に西に向かうのが西部幹線、そして東に向かうのが東部幹線である。

台北駅を出た台東行きの特急は、半時間ほどで瑞芳の駅に着く。映画「悲情城市」(ホウ・シャオオン監督)の舞台となった九份、「無言的山丘(無言の山丘)」(王童監督)の舞台となった金瓜石は、ここからバスで半時間ほどである。この一帯の一種独特の風景と歴史は、映像作家たちを惹き付けてきた。

瑞芳の駅に降り立つと、反対側ホームに「冷氣柴客(クーラー付きデイズル客車)」と呼ばれる列車がぼつんと待っている。これが台湾で数少ないローカル線の平溪線である。

列車は瑞芳駅を出ると、まもなく侯硐駅に止まる。大きな駅だが人影はほとんどない。車窓から見上げると、錆びた工場跡が無残な姿をさらけ出している。「かつてここに台湾最大の炭鉱があったのよ」と、隣の席の人は言う。

廃坑になったのは1990年、そ



【上】先頭車両は特等席。車窓の風景もどこか懐かしい



【中上】屋台の郷土料理



【中下】名物の矢竹(タケノコを食べる)の下ごしらえする人たち



【右】駄菓子屋が今も生きている



線路脇のアイスクリーム  
売りを見る親子



【左】平溪線で唯一残る木造駅舎の菁桐駅。【上】まるで路面電車のように商店街の真ん中を通り抜ける。【下】菁桐に建てられた炭鉱夫の像



は、ちょうど台湾の戒厳令が38年ぶりに解除された年であった。それは台湾全土に空前の好景気をもたらした、株の売買に全島民が狂奔した年でもあり、また、そごうデパートが台湾にオープンして、大阪本店の店頭売り上げを凌駕するほど人が殺到した年でもあった。

そして、90年代半ばになって、この札束の舞うゲームに飽いた人びとが、まるで心を癒そうとするかのようこの地を訪れ始めた。そのころここには、まだ阿遠が乗っていたのと同じ1両編成の列車が走っていたのである。

平溪には、不思議な行事が伝えられている。旧正月の終わりを告げる元宵節(小正月)に、火をつけた提灯を各家からいっせいに空に飛ばすのである。もともとは、この辺境の地に分け入った開拓民が、通信のために使ったものといわれている。

繁栄から取り残された山間に、今日も素朴な暮らしを営む人びとがいる。そうした集落と集落を結ぶ2本のレールの上をいまはカラフルに塗装された観光列車が都会の若者を乗せてやってくる。



【左】嶺脚駅から徒歩5分の嶺脚瀑布。十分瀑布に次ぐ大きさを誇るが訪れる人は少ない。辺りには洞窟が多く神秘的。【上】嶺脚駅に入る下り列車



【上】小さな駅舎を圧倒する大きな看板が特徴。平溪線の中央にあって、唯一上下線が交差できる駅である。【左】沿線を流れる溪谷沿いには歩道が設置されている



18歳になった阿遠に、徴兵の通知が来る。将来を誓っていた二人に別れの日が迫る。籤を引いた阿雲の赴任地は、中国との最前線に位置する金門島だった。落胆する阿遠に、阿雲は1096通の白い封筒を託す。1枚1枚、表には切手が貼られ、住所が書かれていた。

阿遠は厳しい訓練に耐えながら、毎晩ベッドで手紙を書き続ける。阿雲の下宿には毎日郵便が届く。欠かさず返事を書く阿雲。無事に過ぎ去るかに思えた3年間だった。しかし、ある日、ぱたりと阿雲からの返事が絶えるのである。気懸かりな阿遠に残酷な知らせが届く。阿雲が結婚したという。相手は、皮肉にも郵便配達人だった。

兵役を終えて故郷に戻ってくる阿遠。しかし、そこにはもう阿雲の笑顔はない――。

「恋恋風塵」は、阿遠少年のせつない初恋の物語なのであるが、舞台となった平溪の物寂しい風景や繰り返し登場する列車が、観衆の心にとりと焼きついた。

この映画が上映された1987年